

教育方法史覚書 (Ⅳ)

碓 井 岑 夫

(1983年10月15日 受理)

A Note on the History of Teaching Method (Ⅳ)

Mineo Usui

I 研究課題について

小論「教育方法史覚書(I)~(Ⅲ)」のなかで明らかにしたように、戦後の鹿児島県下の教育実践は全国的な動向と若干の時間的ズレを生じつつも、全体としてはその影響下にあった。しかも、大きくは東京を中央とする地方への一方的な影響という傾向をもちながら、他方では、県下の地域、学校の状況に即した教育実践を求める動きが徐々に始まっていた。小論(Ⅱ)で分析した IFEL (Institute of Educational Leadership) 参加者の1人下池実氏は、講習の講義内容を丹念にノートし、ワークショップ(これは講習の新しい演習方式で、午前中の「基礎講義」「関連基礎講義」にそくして、グループ又は個人別に研究する活動)の時間にさらにそれを深めている。そして、講習終了後、現場に戻り各地の研究会に飛びまわるほどの忙しさで出席し、新教育の目的・方法について説いてまわっている。当時の師範学校教官も、東京大学総合図書館で開催された「教員養成問題についての研究集会(ワークショップ)」に参加したり、全国6地区で開催された「新教育研究協議会」への参加を通して、戦後新教育の理念と方法を学びとり、伝達講習・ワークショップの場を通じて県下の教育研究に影響をもたらしている。これらの動きが前段に属するものである。他方では、新教育の紹介を基盤にしつつ小論(Ⅲ)で分析した「昭和25年度九州地区小学校幼稚園教員研究集会」のように、新教育を地域・学校の実態に生かしつつ、地域に生きるカリキュラム改造の動きが現われている。男子師範附属小学校、田上小学校の「生活総合カリキュラム」「生活カリキュラム」などにも、これらの動きを読みとることができよう。これらは後段のタイプになるだろう。

両者とも全国的な動向の傘下にあったことは否定できない。「生活カリキュラムへの展開も学校中心のカリキュラム改造となり、スコープとして地域的視野が含まれつつも実際面で地域教育計画へと発展せず、生活カリキュラムそのものの未成熟さを内包していた」¹⁾のであり、県下のカリキュラム改造の動きは1950、51年度をピークとして変質してゆく。すなわち、戦前教育の反省として「教科カリキュラム」への再検討がおこなわれ、その結果、「相関カリキュラム」「経験カリキュラム」が一時期増加の傾向にあったが、上述の時期を境に再び「教科カリキュラム」へ逆行する。この動向を「変質」とみるかどうかは、カリキュラム論の1つの論争点となるだろう。ここでは、当時の県下のカリキュラム運動の事実を指摘しておくだけにとどめておきたい。

さて、県下の全体的な動向は上述の通りであるが、そのなかで「相関カリキュラム」「生活カリキュラム」の理念をさらに発展・展開させた数少ない学校がある。当時、カリキュラム改造運動で中心的な役割をはたした市来町立湯田小学校、さらにそこに学びつつ「照島教育」として県下に知られた串木野市立照島小学校などである。小論では、この両校とりわけ照島小学校の実践に焦点を当てて、県下の教育方法史上の位置づけを試みたい。既に発表した小論でたびたび指摘したように関連する文書資料などの散逸が著しい。両校ともその基本資料さえ保存されていない状態である。したがって、小論は資料発掘とその紹介を主軸としつつ、学校の教育実践の分析を課題とする。なお、現在のところ基本資料のすべてが発掘されているわけではないので、小論は中間調査報告と呼ぶべき性格のものである。

Ⅱ 「照島教育」前史

「照島教育」で知られた串木野市立照島小学校は、師範付属小学校などといった特別な研究教育条件をもった学校ではない。1952年当時、1学年2～3学級からなる全校生徒総数740名（男子347名、女子393名）の中規模校である。教員数は、校長以下教諭16名（男12名、女4名）、助教諭2名（男1名、女1名）、養護教諭1名。

さて、「照島教育」の前史ともいふべき、当校が研究実践に取りくむ過程を見ておこう。敗戦直後の状況が次のように書かれている。「本校は昭和20年8月9日、戦災によって³⁾、校舎の殆ど全部と児童家庭の大半が焼失し、その上徴用のため、漁船という漁船を失い、その乗組員であった父兄の死傷者も多く、戦争の被害は、他の地域に比較して非常に甚大であった。終戦後の一般的世相の悪化や教育の虚脱状態に加えて、このような地域の特殊条件のために、本校教育は実に困難な状態であった。即ち学び舎も住み家も破壊され、生活を蹂りんされた子供たちの心は傷つき、ゆがめられ、その救済には、途方にくれてしまう程であった。」⁴⁾このような状況で出発した照島国民学校は、1945（昭和20）年12月、バラック2棟を建設して学校の体裁を整える。

『昭和21年4月以降 学校日誌 照島国民学校』と標題された文書から、当時の学校の状況を拾っておこう。

昭和21年4月8日 1. 新入児童入学式 1. 児童ノ旧教科書蒐集 1. 別府組合ニ於テ塩増産協議会及校内歓送迎会。4月10日 1. 総選挙 1. 選挙ノ為児童休業。4月27日 1. 職員南瓜園播種 1. 天長節儀式練習 1. 校内清掃。5月15日 1. 本日ヨリ麦刈リ家庭作業（晴天4日間） 1. 軍掠奪品協議会（伊集院）。5月23日 1. 児童休業 1. 公民教育講習（於鶴丸校）全職員出会。6月10日 1. 新教科書伝達講習会（串木野青校にて）全職員出会。6月22日 1. 雨天ニ付堆肥増産行ハレズ 1. 適格審査会ニ提出スベキ一件書類、記載方説明 1. 甘薯苗注文一件。7月20日 1. 第1限終了式あり 第2限成績発表其の後作業をなす 2. 午後、串木野校に於けるバレーの予選に全職員出会。

以上、1学期の「学校日誌」から抜萃したが、学校教育が十分に行える状況でなかったことは容

易に想像できる。教職員自らが生活を維持することに精一杯であった様子がかげえよう。そのなかで、伝達講習、教科研究会がぼつぼつと開かれていたようである。

1947（昭和22）年4月。「6・3」制とよばれた新学校制度のもとで、照島小学校と改称。同校が、「照島教育」として県下にその名が知れ渡るようになるのは、1951年以降であるが、それを準備する過程をもう少し見ておこう。

『昭和25年度 学校日誌 照島小学校』から引用する。

4月22日 西園，秋田，村木，上池，今村，西別府，中村，佐藤各先生認定講習出席（伊集院）当該担任学級は児童登校せず。4月24日まで。5月15日（上記の諸先生）認定講習出席。5月26日 西別府，川崎，山口，西郷，宮之原，上原（鹿児島講習会）出張。6月26日「社会科単元表」完成。8月27日 認定講習。9月9日～10日 小学校部認定講習 宮之原，土器屋，馬渡，川崎，西郷，秋田，村木，上池，宮内，西別府，中村各先生出會。9月28日 ワークショップ第1日目 西園，上池先生出発。

さて、同校が県の研究指定校となって、全校を挙げて研究に取り組み始めるのは、1951（昭和26）年4月のことである。当時の状況は「昭和26年4月，県の研究指定校としての出発にあたり，私たちは，其の当初計画として『本校教育の計画』に経営の骨子を綴り，それから1年位に研究の後，昨年11月の市主催研究発表会の機にそれまでの学校の雰囲気のうちりかわりを表示したい気持ちも手伝って，研究物の題目も『楽しい学校』と改めて，研究の過程を明かにし進むべき方向を示して，皆さんの御指導を仰いだのである⁶⁾」と書かれている。それ以前の動きを『学校日誌』で見ると，昭和25年12月4日の欄に「今週の行事 今月の行事打合せ及実験学校の件について 教科主任会 第4時間目より」と記されているのが最も早い。そして，12月7日「午後3時半より職員会 モデルスクールの件，今後の研修会の件」，12月11日「2時45分より職員会 5時半迄 実験学校研究題決定の件」，12月13日「明日午前授業 指導主事来校の為午後実験学校研究題決定の件」，続いて，12月14日「午後1時15分より 実験学校についての研究討議 午後6時迄」と記録されている。これが照島小学校が研究指定校として出発する時点の経緯である。この研究指定がどのように決定したかは不明であるが，山之内重遠串木野市教委指導主事らの勧めを，当時の児玉校長が引き受け，職員会議にはかったのではないだろうか⁶⁾。とくに，後の同校の実践の枠組みを考えると，かつて「鹿児島県内地留学生奈良女高師附属小学校教官」の経験を持ち，同校の『たしかな教育の方法』にも「同人」してと名前を連ねている県教委指導主事下池実氏⁷⁾の影響が大きいと思われる。12月18日には下池主事来校予定（23日）とあるが延期となり，実際には，翌1951（昭和26）年1月10日来校である。『学校日誌』によれば，「下池主事講演 10時—3時半頃まで，市内校長その他数名参加，夕刻より主事を囲んで教科主任，学年主任と打合及び酒演⁸⁾」。その後，1月12日「湯田小学校視察 全職員出張休業 午前中授業参観 午後討議会」。1月13日，「湯田小学校視察反省会」。1月15日，「奈良視察団出発 若松，宮之原，土器屋，西園先生（急行）」と記されている。下池主事来校までに，校内の職員の意志が決っていたようであるが，湯田小学校の視察，そして，奈良女

高師付属小学校へ視察代表団を送るなど、急な動きである。

さらに、1月下旬から3月上旬にかけて、「奈良プラン」を基本的な枠組みとしたカリキュラム作りが連日のように討議される。山之内主事と奈良視察団が話し合っ、具体的プラン作りにとりかかると同時に「仲良しグループ」の編成と実践が取り組まれている。1951（昭和26）年2月3日の『学校日誌』には「学級名決定 月組、雪組、花組」の記事が見られる。従来、同校はいろは組分けをしていたが、奈良女高師付小が月組・花組と学級名をつけているのに倣って、月、雪、花組に変更したという。当時の同校の「奈良プラン」への傾倒ぶりが知れよう。

以上のように「奈良プラン」との関係は、内容的、人的関係において深い結びつきがあるが、本校の教育実践が同プランの引き写しなしいし亜流であるかという、必ずしもそうではない。むしろ「奈良プラン」に出会うまでの同校の教師集団の取り組みは意欲的である。『てるしま』第3集は、次のように回想している。「教育は、おかれた歴史的、地理的、課題解決の問題から出発させなければならぬが、本校は全く戦争の悲劇の廢墟に立ってあらためて、教育の目標を探究しはじめねばならなかったのである。そこで先ず私たちは、何よりも、この、すさみかけた子どもたちの心を今一度純真なものにとりもどそうと、昭和24年度からは『子どもらしい、かわいらしい照島の子ども』の育成に教師も、子どもも、親も一体となって、努力をはじめたのである。それから2ヶ年の努力は、只一素朴な人間性の回復一であった。その時先ずこの問題を解決しなければ、私たちの教育は意味をなさなかつたのであって、これは焼け跡の中から、新しく人間と社会を、つくり出そうとするわれわれの念願、即ち『ひこばえ』精神の展開であった。すなわち全く否定されたものが、再び自己を育てる原理は、やはり、自己の根底からのみ、出てくるものでなければならぬのであって、それは単に古きものの延長ではなくて、自己の新しい原理の発見の意見でなければならぬと考えたのである。われわれは、われわれの歴史に否定的に働きかけた異質的な他者の原理を、木に竹をつぐのではなくて、自己成長の原理に培う肥料の意味で、純粹に媒介して、近代の人間を作りたいと願ひ、その第一段階として、先づふみにじられた、子どもたちの一人間性の回復一から手をつけ始めたのである⁹⁾と。研究誌の回想的文章なので、やや整理されすぎているきらいがながしとしないが、当時の教育実践の方向がある程度理解できよう。「ひこばえ」精神を自称するように、子どもと教育の現実の姿を出発点としてとらえ、その主体が内に秘めている力に依拠することなく両者とも発展しないことを確信している。その意味では、子どもの可能性への信頼と教育活動の重要性を認識する点で、教育思想の原点を示している。当時の校内の職員会の様子は『学校日誌』と関係者の証言による他はないが、校内で毎週火曜日を職員研究会として、子どもの問題、教科研究を夜の8時・9時まで討議したことが記されている。また、関係者の証言でもこうした、事実が確認されている。

次の段階では、単なるヒューマンイズムの育成という漠然とした立場から、実際の子どもの姿にそくしつつ、しかも目標をもった子ども像として発展してゆく。次のように述べている。「第3年目（昭和26年度一引用者註）からは、この『子どもらしい、かわいらしい子ども』の育成という主とし

て個人的な性格の形成から一步前進して、何でも自分から進んでする子ども—自主性・よく力を合わせることでできる子ども—協力性の育成という社会人としての能力練成へ努力目標を高めたのである。』⁹⁾

こうした子ども像の探求が、「奈良プラン」との接点を作りあげていくのである。人間関係的な結びつきは既に述べたが、それは単なる偶然ではない。むしろ、照島小学校の教育探求と「奈良プラン」とは共通性を持っており、奈良女高師付小学習研究会がそれをより体系化実践化していたと考えられよう。内容的な結びつきを見てみよう。「われわれは、この自主、協力の力を底力とする、時代を創り上げていく力強い人間は、いわゆる奈良でいう『強い人間』ではないか。このねらいはどこかに共通している点があるのではないかと考えおよんだのである。われわれは、直ちに四名の同志を奈良に派遣して、それを確かめようとしたのであるが、其の報告によると、皮相な観察であったろうが、学校の雰囲気、子どもたちの学習の態度から、学習の形態に至るまで、正にわれわれが夢みるそのまゝの姿であった。即ちわれわれは、渴する者が、水を得た如くして、直ちに奈良そのままを理想の姿として、取り入れることにしたのである。』¹⁰⁾

かくして、同校と「奈良プラン」との結びつきが生まれた¹¹⁾。この段階では、「奈良プラン」をモデルとした湯田小と並ぶ照島教育にすぎなかったが、その後の実践のなかで独自性を追求して「奈良プラン」との距離をつくっていった。

Ⅲ 『たしかな教育の方法』の教育思想と構造

鹿児島県下はもとより、全国のカリキュラム運動に影響を及ぼした¹²⁾「奈良プラン」とは一体どんなものであったのか。その紹介、分析を通じてカリキュラムの構造を明らかにし、その影響について検討しよう。

当時の奈良女高師付属小学校の研究実践は、同校学習研究会『たしかな教育の方法』（1949年5月 秀英出版刊）に集約されている。同校は、戦前から「学習法」など先駆的な研究実践をすすめた学校として著名であり、戦後も1947（昭和22）年社会科授業にいち早く取り組み¹³⁾、毎年、研究会を開いている。そして、同年秋に、当時文部省教科書局第1編修課¹⁴⁾にあって社会科の学習指導要領編集に当たっていた重松鷹泰氏が、同校主事として赴任して以来、カリキュラム、社会科研究などの中心となる。

小論では、同校の研究実践の全体を検討することはできないので、照島小学校がモデルとした『たしかな教育の方法』を検討することに限定する。既に述べたように、同書は1949年5月発行であるが、それは同校の研究実践の集約と考えてよい。

さて、同書は「1. 私たちのねがい 2. 教育計画の立て方 3. 学校のすがた 4. 「しごと」の指導計画表 5. 各種能力指導系統表」から成っている。筆者は、「この実践の基底には、2つの重要な考え方がある。1つは、敗戦後の社会のなかで、本校教育が形成すべき新しい人間像—民主的な社会を建設するための望ましい国民像（教育目標）—をどのように構想するか。2つは

そこで構想された教育目標をどのような教育活動で達成するのか。この2つ、つまり、教育目標とその計画化こそが、この理論と実践を生み出す基本的なエネルギーであったといえよう¹⁵⁾と書いた。戦後初期の教育界が混乱していた時期であったからこそ、教育目標—計画化というスケールの大きい構想をもちえたのであろうが、ここには同校の並々ならぬ研究実践への熱意が伝わってくる。

「教育の目標」を先ず検討しよう。同書の冒頭は次の文章から始っている。「私たちは、人間らしく生き、人間らしく死にたいと思います。私たちは、子どもたちを、人間として強い人間にそだてたいと、願っています。いきいきとした人間、自分で考え、自分で責任をもって、事をしていく人間が、みちみちることは、新しい日本が、まち望んでいることです。それが、ほんとうの民主主義をなりたたせていく土台であるからです。」¹⁶⁾とくに取りたてて引用するほどの文章でないように見えるかも知れないが、同人たちが議論に議論を重ねて得た平凡な教育目標なのである。しかし、その平凡さに同校の研究実践の奥深さと普遍性を読みとるべきであろう。教育目標を得るまでの過程をこう述べている。「教育計画を立てるに当って、まず問題になるのは、教育の目標です。私たちの場合にも、これについてたくさの論議がかさねられました。その結論はきわめて平凡な『人間として強い人間』をつくるという言葉にまとめられてしまいました。もともと、教の育目標は、憲法の前文なり、教育基本法の冒頭なり、あるいは学習指導要領なりに、示されています。しかしそれをほんとうに私たちのものとするためにはやはり十分それを検討し、自分たちになっとくのいくものにしなければなりません。その意味で『人間として強い人間』という言葉は、私たち同人にとっては深い意味といきいきした魅力を持っています。」¹⁷⁾

「人間として強い人間」とはなんであろうか。「自己に誠実な、独立した人格は、現代日本の民主的公民に、ぜひ必要なものであり、私たちのいう、人間として強い人間の根本であると信じています」と述べている。「自己に誠実であるということは、自分の人間らしい生活をしたいという切実な要求をはつきりと認め、それを主張することから、はじまります。」¹⁸⁾この「要求」を基本的人権と他人のそれをも尊重する義務という両面からとらえ、「社会正義に敏感であり、権力に屈せず、時流におもねらず、正義の実現」につきすすむ「独立した人格」がそれを必要とするという。ここには、戦前の国家主義的教育体制への厳しい反省がある。国家主義的教育によって国民の思想・信条が画一化され、基本的人権すら奪われてしまった結果、太平洋戦争の敗戦という大きな代償を払わねばならなかったことへの自己反省であろう。それだけに、「人間として強い人間」の内実とそれを実現する教育実践への展望には、同人たちのすざまじいエネルギーがこめられている。こうした人間観は、重松鷹泰氏が社会科に期待したものに通じている。氏は、「社会科の使命」として、「(1)日本人の子どもたちに気魄をもたせる」こととし、その形成方法として「それは生活の現実と取組んでいく逞ましい意欲であり、生活そのものを正しくきわめ、その生活を生活させることによる」と考え、また自分自身を統御し方向づけていくところにある」という。次の「(2)人間性の回復をはかる」は、同校の人間観と比較するとき、重松氏が同校に与えた影響の大きさがわかる。こう述

